

「環境にやさしい稲作」にチェンジ！
 重点推進事項【①減肥・減農薬 ②品質向上 ③コスト低減】

新潟西部地域農業振興協議会
 JA越後中央、西蒲区
 巻農業普及指導センター

出穂期は「平年の1日遅れ」の予想 葉色濃く、倒伏危険域！ 一回目の穂肥は控える!!

1 生育状況

期待値との比較で

草丈： やや短 茎数： やや少 葉数： やや早 葉色： やや濃
 (一般ほ場では並) (平年差1日遅れ)

生育調査結果 (6月21日現在、普及指導センター調査)

品種名	移植区分	草丈 (cm)			茎数 (本/m ²)			葉数 (L)			葉色 (SPAD)		
		本年値	期待値	期待比%	本年値	期待値	期待比%	本年値	期待値	期待値差	本年値	期待値	期待値差
コシヒカリ	連休	43	45	96	319	470	68	8.9	8.3	+0.6	41.3	40.0	+1.3
	適期	41	45	91	365	470	78	9.1	8.3	+0.8	41.1	40.0	+1.1
こしいぶき	連休	43	45	96	506	500	101	9.5	9.2	+0.3	45.4	40.0	+5.4

※コシヒカリのデータは、巻ほ場と潟東ほ場の平均値。こしいぶきは巻ほ場のデータ。

2 出穂予想と穂肥

幼穂形成期・出穂予想と穂肥のめやす (5月第1半旬移植) 注3

品種名	幼穂形成期	出穂期	穂肥時期		窒素施用量 注1 kg/10a
			一回目	二回目	
五百万石	7/5	7/27	7/7 (-20)	7/15 (-12)	0.5~1.5
わたぼうし	7/5	7/27	7/5~7/7 (-22~-20)	7/15~7/17 (-12~-10)	1.5~2.5
ゆきん子舞	7/6	7/28	7/3~7/5 (-25~-23)	7/14 (-14)	1.5~2.5
こしいぶき	7/7	7/29	7/6 (-23)	7/15 (-14)	1.5 注2
ひとめぼれ	7/8	7/30	7/5~7/10 (-25~-20)	7/16~7/20 (-14~-10)	1.5~2.5
ゆきの精	7/10	8/1	7/7~7/12 (-25~-20)	7/18~7/22 (-14~-10)	1.5~2.5
こがねもち	7/11	8/2	7/15~7/18 (-18~-15)	7/23 (-10)	0.5~2.5
連休植 コシヒカリ	7/14	8/5	7/18~7/21 (-18~-15)	7/26 (-10)	0.5~2.5
10日植 コシヒカリ	7/17	8/8	7/21~7/24 (-18~-15)	7/29 (-10)	0.5~2.5
越淡麗	7/19	8/11	7/24 (-18)	8/1 (-10)	0.5~1.5

注1: 窒素施用量は、2回の合計施用量

注2: 砂壤土などの地力の低いほ場では、1kg/10a程度多めに施用する。

注3: 幼穂形成期・出穂予想は、天候により前後するので、幼穂や生育状況をよく確認する。

◎穂肥施用の注意点

○**稲は全般的に遅出来で葉色が「やや濃い」傾向なので、一回目の穂肥は控える。**

○穂肥は2回に分けて施用し、1回の穂肥量は窒素成分で1.0～1.5kg/10a程度とする。

○稲体活力を維持し登熟を向上させるため、二回目の穂肥を重点に施用する（生育過剰の場合を除く）。特に、砂質土壌等で登熟期に栄養凋落しやすい場合は、有機質肥料や緩効性肥料を使用し、後期栄養を確保する。（例：コシヒカリでは、一回目1.0kg/10a、二回目1.5kg/10a）

○遅い時期の穂肥は食味の低下を招くため、極端に葉色が低下する場合を除き、出穂前10日以降の穂肥は慎む。

◎穂肥診断のポイント

一回目穂肥時の生育量のみやす

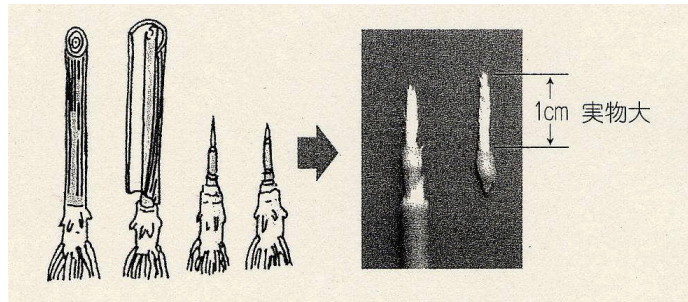
品種名	こしいぶき(出穂前23日)	コシヒカリ(出穂前18日)	
幼穂長	0.1 cm	0.5～1.0 cm	
草丈	55～60 cm	70～75 cm	
茎数	60株:28～30本/株	60株:25本/株以下、50株:30本/株以下	
葉色	35～37 (SPAD値)	30～33 (SPAD値) 3.0～3.5 (CS・群落)	

これより長草、茎数多葉色濃い場合は、遅め、控えめの穂肥とする。

幼穂長と出穂前日数（コシヒカリ）

出穂前日数	幼穂長
30日前	0.2 mm
24日前	1.0 mm
20日前	2.0 mm
18日前	1.0 cm
12日前	4.0～6.0 cm
10日前	8.0～12.5 cm

幼穂の確認方法



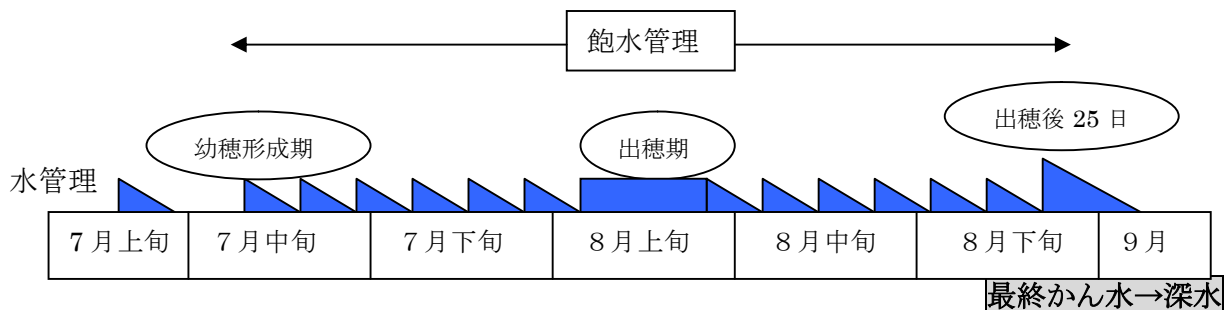
3 水管理は「飽水管理」を継続する

○**幼穂形成期以降、出穂後25日までは確実に飽水管理を継続し、登熟向上を図る。**

○異常高温や強風フェーンが予想される時は、予め湛水し、稲の急激な蒸散、障害発生を防止する。

○コシヒカリは、8月末までかん水し、最終かん水は、深水として自然落水を図ること。

飽水管理・・・湛水した水が減って田面の足跡の水がなくなる前に、次のかん水を行うこと。
玄米の土壤中カドミウムの吸収抑制にも効果がある。



4 病虫害防除

○いもち病：わたぼうし等いもち病に弱い品種や、転作・ほ場整備跡こしいぶきは、葉いもちの発生に応じて1～2回の穂いもち防除を必ず行う。

○紋枯病：前年に発病したほ場や早生品種では、紋枯病の発生に留意する。

○カメムシ類：カメムシの生息密度を下げるため、6月中～下旬と7月中旬に農道・畦畔等の草刈りを必ず行い、適期に防除を実施する。

生産履歴は、こまめに記帳し、農薬は最新の登録内容を確認の上、適正に使用しましょう。